

聖書：ピリピ 1：19～26

説教題：生きることはキリスト

日時：2016年11月27日（朝拝）

パウロはこの手紙を獄中から書いています。彼は自分のことを心配してくれているピリピ教会に対して、1章12節から近況について書き始めました。前回の18節までの部分で、これまでのことについて述べました。そして実は18節の最後の部分から新しい内容に移行しています。18節最後の「そうです。今からも喜ぶことでしょう。」という部分は、一見、その前の「私は喜んでいます」という言葉を強調するために、繰り返して語った言葉として読めなくもありませんが、ここで時制は「現在形」から「未来形」に変わっています。つまりパウロはここまでは過去と現在について語りましたが、18節の最後の部分からは将来のことへと話題を移しているのです。今日はその将来の見通しについて彼が語っている部分を見て行くことになります。

なぜパウロは「これからも私は喜ぶ」と言っているのでしょうか。その理由が19節に「というわけは、・・・このことが私の救いとなることを私が知っているからです。」と記されています。まず押さえないのは、ここの「救い」とは何を意味するかということについてです。ある人はパウロが牢屋から救い出されることと考えますが、そうでないことはこの後の文章から分かります。次の節に「生きるにも死ぬにも」とありますように、パウロは今後自分がどうなるか、よく分からない状況にありました。死ぬ可能性もあり得ると彼は考えていました。ですからここの「救い」は、牢屋からの救出という意味ではありません。ではどういう意味なのか。それはパウロの救いの完成のことだと思われまます。1章6節に「あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださる」という御言葉がありましたが、パウロが聖化のプロセスを経て、最終的な救いに到達すること、永遠の救いに入ること。そのためにパウロを取り巻く色々な状況が用いられると彼は言っているのでしょう。牢屋の中にありつつも福音宣教が前進しているというこの状況が、パウロの救いにつながり、促進させるということです。

しかし次の20節から分かることは、パウロはただ自分が無事、天国に入る者となることだけを考えていたのではないということです。パウロが言う救いとは、20節にあるように「生きるにも死ぬにも私の身によって、キリストがあがめられること」と一つの

ことでした。これがパウロの生きる一大目的でした。彼の切なる祈りと願いでした。この道を最後まで歩み抜くことが彼にとっての救いを意味していたのです。パウロはこの後、自分がどうなるか分からない状態にあります。牢屋から出られるかもしれませんし、あるいは獄中で殉教するかもしれません。しかしどんな場合にも恥じることなく、いつものように今も大胆に語る。そうして私の身によってキリストがあがめられること。これを全うすることがパウロにとっての救いであるということです。

これは私たちにも当てはまることです。私の救いは、私の身を通してキリストがあがめられることと切り離して考えることはできないということです。救いの道を最後まで踏み進む人は必ずその身を通してキリストの栄光を現わすという人生を歩むのです。この二つを別々のことのように考えてはならないのです。救われていることの実質は、その生き方に「実」となって必ず現われ出なければならないということなのです。

パウロはそのために 19 節で、あなたがたの祈りが必要だと言っています。ここにパウロの謙遜と信仰が見られます。私たちが救いの最後の状態にまで到達することは単に一人の課題ではないのです。他の兄弟姉妹に祈られて初めて、またその祈りを通して働くイエス・キリストの御霊の助けを頂いて初めて、実現するのです。あのパウロでさえこう語っていたことを考えるなら、私たちはどんなに他の兄弟姉妹の祈りを必要としている者でしょうか。また私たちはどんなに他の兄弟姉妹の救いの達成のためにとりなさなければならないということになるのでしょうか。

さてパウロは自分にとっての祈りと願いは「生きるにも死ぬにも私の身によって、キリストがあがめられること」だと語りました。これを受けて、生と死を自分はどのように考えているのかということ を 21 節から 23 節にかけて語ります。ここにピリピ書の中でも特に有名な言葉の一つが出て来ます。21 節：「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です。」 皆さんは生と死をどのように考えているのでしょうか。あるいは生と死のどちらの状態を望むのでしょうか。普通、「生と死のどっちがいいか」と問われたら、ほとんどの人は生が良いと言うでしょう。死にはなるべく近づきたくない。死んだらすべて終わりだ、そこに良いことは何もないと人々は思っている。そんな私たちにとって「死ぬことも益です」というパウロの言葉は衝撃的です。あるいは他の人々は、死の方が良いと言うかもしれません。この世の人生に疲れ、この世に良いことは何もないから、早く死んだ方がましだと考えて、死の方が益だと言うかもしれません。し

かしパウロが言っていることはこのどちらでもありません。パウロはここで「生と死のどっちも魅力的だ」と言っています。どっちも素晴らしくて、どっちを選んだら良いかわからないほどのジレンマの中にあるという言い方をしています。

まず生についてパウロは「私にとっては、生きることはキリスト」と言います。このように一言で言い切るパウロに接して、私たちは「さすがパウロ」と思います。そしてとても私はこのようには言えないとを感じるものです。しかしこの言葉は良く注意して考える必要があります。彼はここで「生きることはキリストのため」とは言っていません。彼が言っているのは、生きること＝キリストということです。つまり彼の生はキリストという一言で説明されるということです。ここにはパウロがキリストのために献身しているということも含まれますが、それよりももっと根本的な事実を示しています。すなわち何よりも彼の人生はキリストにあって成り立ち、キリストにあって導かれているということです。ガラテヤ書 2 章 20 節：「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」ですから彼はここで自分はキリストのために献身しているということを誇っているのではなく、自分はキリストにあるいのちに生かされているという恵みを深く味わっているのです。その恵みをかみしめながら、私にとっては生きることはキリストであると言っているのです。

この「生きること」の側にとどまるなら、22 節にあるように「もしこの肉体のいのちが続くとしたら」、「私の働きが豊かな実を結ぶことになる」と言います。私たちはこれを聞いてまた、さすがパウロだ！と思いがちです。確かにパウロは生き永らえたら使徒としての宣教の実はさらに結ばれることになるのでしょう。しかしこれは私たちにも当てはまることだと思います。先に見た 1 章 6 節に、「あなたがたのうちに良い働きを始めた方は、キリスト・イエスの日が来るまでに、それを完成させてくださる」とありました。そして 11 節に、そのイエス・キリストの日に、私たちは「義の実に満たされている」と言われました。ですから地上での命が続くということは、キリストにあってさらに豊かな実を結ぶということなのです。私たちの地上の人生はそういうものとして与えられているのです。

一方の死についてパウロは「死ぬことも益です」と語っています。これはどういうこ

とでしょうか。その答えとして23節に、死は「世を去ってキリストとともにいること」だと言われています。ここにクリスチャンの死後の状態が示されています。これは他の聖書の御言葉とも一致します。たとえば十字架上でイエス様を信じた強盗の一人に対して、イエス様はルカの福音書23章43節で「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」と言われました。またⅡコリント5章8節には「むしろ肉体を離れて、主のみもとにいるほうがよいと思っています」というパウロの言葉もあります。これらが共通して語っていることは、信者は死の直後から主とともにいるという状態に入ることです。そしてその状態は今の状態よりももっと素晴らしいということです。私たちはこの地上にある時から、ある意味で主とともにあると言えますが、やがての状態は今とは比較にならないレベルでそうだとことです。私たちはこの世でもキリストが共にいてくださるという経験を何度となく味わうでしょう。主がそばにいてくださり、みことばを語りかけてくださり、ご自身を現わしてくださり、その臨在をもって慰めてくださったという経験を。しかし残念ながら、それは永久に続くものではありません。ある時、私たちは自分の魂に命がなくなったように感じたり、キリストが遠く離れてしまったように感じたりします。しかし死の向こう側はそうでないのです！キリストとの親密な交わりを妨げるものは何もないのです！地上で味わったキリストとともにあるあの最も幸福な時間は永遠に続くのです！涙とともに味わったあの素晴らしい瞬間が、一瞬も途切れることなく、いつまでも続くのです！それは何と素晴らしい状態でしょうか！

そう考えると、どっちが良いでしょう。俄然、死の方が良い！ということになるでしょう。もちろんこのことは早く死んだ方が良いとか、キリスト教は死を勧めるということではありません。逃避するように死を望むのはキリスト教信仰としては正しくありません。今ここで「私にとって、生きることはキリスト」という生き方をしていない人が、どうして死後、キリストがともにいてくださることを確信して「死ぬことも益です」と語ることができるでしょうか。やはりこの地上で「生きることはキリスト」と告白する歩みがまずあって、その延長線上に「死ぬことも益です」という慰めがあるのです。

そのことを押さえた上で、どっちがより素晴らしい状態かと言えば、やはり死の向こう側の方が素晴らしい。パウロも22節で「実は、そのほうがはるかにまさっています」と言っています。個人的にどちらが良いかと尋ねられたら圧倒的に後者である。神の定めの日が来て、キリストのもとへと召されるなら、そっちの方がはるかに素晴らしい。

ところが驚きは、そう述べながら、最終的にはそれとは反対の道へと戻って来るパウロの姿です。そのことが 24 節以降に記されています。まず 24 節：「しかし、この肉体にとどまることが、あなたがたのためには、もっと必要です。」 自分のことだけ考えれば、早く御国に行く方が良い。しかしピリピ人たちのことを考えれば、なお肉体にとどまる方が良い。25 節にあるように、そうすればあなたがたの信仰の進歩と喜びのために仕えることができる。私たちはこれを読んで、これはパウロだから言えることであって、私にはとても当てはまらないと思うかもしれません。私なんか役に立たない者だから、早く地上からいなくなった方がかえって益となるとさえ思うかもしれません。しかしパウロはどのようにして彼らの信仰の進歩と喜びのために仕えられると言っているのでしょうか。25 節に「あなたがたといっしょにいる」ことでとっています。確かにパウロが牢屋から出てピリピ人たちのところに帰還すれば、様々な証や御言葉の宣教によって、彼らの益に仕えることができるでしょう。しかしここにある原則は私たちにも当てはまることだと思います。こんな私なんかいてもしょうがない。かえってつまずきになるだけだと思うかもしれません。しかし先に見たように、私たちの人生もキリストにある人生です。キリストが光を放ってくださる人生です。必ず実が結ばれる人生です。そういう私たちも一緒にいるだけで、この役割を果たすことができるのです。実際、他の兄弟姉妹の存在はそうではないでしょうか。一緒にいるだけで、その人が持つ賜物や信仰の光によって、私たちは大いに励まされ、喜びを覚え、また支えられ、慰められる。その人がいないと私たちは寂しいし、色々な祝福を受けられない。各々の賜物や特性に違いはありますが、キリストにあるがゆえの光を持つ兄弟姉妹の存在そのもの、その姿、その表情、その声だけでも私たちの励ましとなり、信仰の進歩と喜びのための支えとなる。そのことを思って、私たちも自分の存在がキリストにあって用いられて、他者の祝福に仕えるものとなるように祈り求めながら、ささげて行くべきではないでしょうか。26 節に、そうならば「私のことに関するあなたがたの誇りは、キリスト・イエスにあって増し加わるでしょう」とあります。ここの「誇り」という言葉は「喜び」という意味を持つ言葉です。パウロが注意深く「キリスト・イエスにあって」という言葉を加えていますように、ピリピ人たちの喜びは単にパウロに会うから沸き起こるのではないのです、それはキリスト・イエスにある者たち同士だからこそ与えられるものなのです。私たちはお互いにそうなのです。キリスト・イエスにあってお互いに支えられており、また支え合うことができる恵みの中に生かされているのです。

以上の御言葉の中で、私たちの心に特に留まるのは有名な 21 節で、中でも「死ぬことも益です」という言葉に慰められるかもしれません。それはそれで良いことです。しかし全体の文脈を考慮する時、最終的に心に留めるべきは、死後の状態の方がはるかに望ましいと言いつつも、この世で生きることへと帰って来たパウロの姿でしょう。彼をそのように導いたものは何か。それは自分のことよりも、他者の益のために仕えようとする心でした。そしてこれはどこから生まれて来たかと言えば、やはり「生きることはキリスト」と告白するキリストとの交わりからだったのではないのでしょうか。

今週からキリストの降誕を覚えるアドベントに入ります。キリストはこの時、天の栄光の座を捨ててもべとなつて私たちのところへと下って来て下さいました。それは私たちに仕えるため、私たちに真の益を与えるためでした。そのキリストに感謝し、キリストと心が一つに結ばれている人は、そのキリストを映し出す歩みをするようになるでしょう。そういうパウロの姿が、この箇所「他者のために仕える道を喜んで選択する」という生き方に現わされているのではないのでしょうか。私たちはパウロと違う点があくつもありますが根本的には同じです。こんな私でもキリストにあつて仕えることができます。神が良しとする間、一緒にいるべき人たちと一緒にいることによって、その人々の祝福のために用いていただくことができます。私たちはキリストに感謝して、この身を通してキリストの素晴らしさが現れ出ることを祈り求めたいと思います。周りの人々と共に過ごすことによって、キリスト・イエスにあつてその方々の励まし、支え、信仰の進歩と喜びのために仕えることができますように。「私にとって、生きることはキリスト」というパウロの告白を自分の告白として味わって、そのキリストにならう歩み、他者の祝福と喜びに仕える歩みへ導かれて行きたいと思います。